

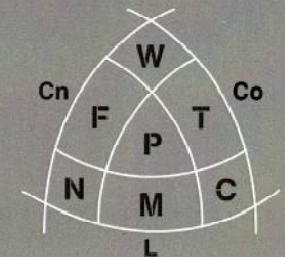
エコミュージアム 日本村づくり

■ 活動プログラム協働 (Co)

これは地域 (L) でいろいろな人々と協働して、持続可能な社会を形成するプログラムで、すべての学習プログラムを包含する。

■ 木俣美樹男 (植物と人々の博物館プロジェクト)

Co



index

1. エコミュージアムとは何か
2. エコミュージアム概念の応用

1. エコミュージアムとは何か

エコミュージアム (エコミュージゼ) とは、地域の自然や文化、暮らしをめぐるすべてをまるごと「博物館」としてとらえ、住民と行政が一体となって、いろいろな人々や団体が連携して環境を保全し、創造する概念であり、実践的な営みでもあります。フランスのエコミュージゼ憲章の定義によれば、「エコミュージゼは、ある一定の地域において、住民の参加によって、その地域で受け継がれてきた環境と生活様式を表す自然・文化財産を総体にして、恒久的な方法で、研究・保存・展示・活用する機能を保障する文化機関である」としています (リビエール 1972、大原一興 1999)。日本エコミュージアム研究会は、簡略なエコミュージアム憲章を作り、概念規定をしています。伝統的知識体系を学ぶ場であり、学びを通じたエコツーリズムであり、持続可能な地域づくりの概念および活動手法でもあると思います。

基本的な構造は、①コア博物館、②サテライト博物館、および③発見の小道によって構成されます。コア博物館はビジター・センターを兼ねた郷土資料館のようなもので、常駐する職員を置きたいものです。ここにくれば、地域のいろいろな情報が大方揃うようになります。地域学習を保障するために各種の郷土資料などを整理し、データベースをつくり、展示し、求めに応じて解説などもします。また、人の出合いを企画し、団体や行事など活動の全体を調整します。このためには協議会組織が必要です。後で述べますエコミュージアム日本村を例にとりますと、環境 NPO のほか、観光協会、商工会など地域の色々な団体が参加しているミュージゼス研究会という組織で対応しています。隔月程度の会合には、主な企画調整者たちと、関心

※引用文献

- シューマツハ、E.F.(1973):[小島慶三・酒井豊訳:スモール イズ ビューティフル、講談社(1986)]
 Cotton, C.M. (2002): Ethnobotany—Principles and Applications [木俣美樹男・石川裕子訳:民族植物学—原理と応用、八坂書房(2004)]
 木俣美樹男(2002) 通学圏の自然、環境文化を活用する総合的な理科学習、初等理科 36(11): 10-13.
 大原一興(1999) エコミュージアムへの旅 鹿島出版会

を持つ地域の人々が出席して、計画と企画を話し合い、団体間の活動や日程などを調整しています。サテライト博物館は、地域のめばしい自然物や文化財がある場所です。巨木、川、湧水地、社寺、遺跡など、良い学びを提供する場であれば何でも良いのです。発見の小道はこれらを地理的に、また物語としてもつなぐ道というものです。簡単な解説書とルート・マップがほしいです。



私たちは、日本のエコミュージアムづくりの草分けで、いろいろな試みを30年余り実施してきました。地域調査で訪問して、多くの方々と出会い、場所が気に入ったら、環境学習の場とできるように、地域の人々と合同研究会をもって構想を練り、話し合います。何事も言葉や図に表すと、具体的に議論が進みます。次の図は議論の始まりの頃のもので、

エコミュージアム奥多摩日本村 Ecomuseum Okutama Japan Village (構想原案)

コア・ミュージアム
「植物と人々の博物館」づくり
Core Museum
Plants and People Museum

2006. 1. 23 改定

植物に満ち溢れたエコミュージアム —健全な心身を育む学びのむら—

心のこもった知恵と物事を提供するコア博物館

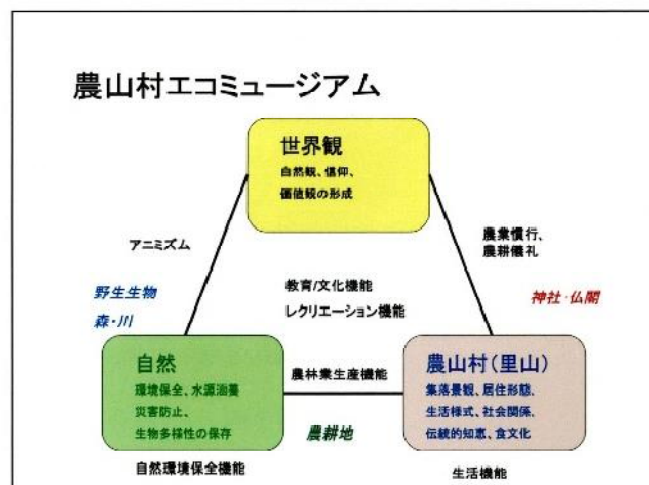
事業内容:

- ・ 公開展示、図書室
- ・ 草木の栽培、配布(むら中に花を咲かせる)
- ・ 環境学習ELF普及、雑穀栽培普及
- ・ 環境学習指導員(野人)認証
- ・ 植物や民具の収集整理、収蔵
- ・ 植物と人々の調査研究
- ・ 地域振興企画

2. エコミュージアム概念の応用

(1) 農山村エコミュージアム

エコミュージアム概念の応用として、下位概念である農山村エコミュージアムを提案しました。図に示すように、農山村エコミュージアムは伝統的な地域社会や景観が遺存的に残っている農村の多面的な機能を重ね合わせたもので、自然と直接関わりながら、伝統的な生物文化、生活環境文化に関する知恵や技能を豊かに継承している農山村地域におけるエコミュージアムづくりの活動概念です。過疎化の大波に洗われて困窮しつつも、森林を保全し、第一次産業の場を保ち、自然に関する伝統的な知恵を継承しながら、農工業用や一般家庭用の水源となり、文明社会あるいは都市を大きく抱擁しているのが農山村です。コア博物館を郷土資料館や学校とすると、発見の小道は登山道、林道や生活道である。サテライト博物館は農家、社寺、農耕地や里山、周囲の自然すべてということになります。ここでは冒険学校の長年の経験からして、年齢を問わず「わくわく、どきどき」するような多彩な環境学習プログラムが展開できます。たとえば、台風のとときの渓谷を流れ下る岩の、雷よりも大きい音を誰が聞きたくて聞けるでしょうか。美しくも厳しい自然の中で生きる動物ヒトとしての充足感から生きる意味が自覚できます。やっと釣れたヤマメの塩焼きの味、喉の渇きを癒すつまみのキイチゴの果汁、種子から挽いて打ったそばの味、すべて素晴らしい直接体験であり、知恵として伝統的知識体系に組み入れられる素材です。



都市住民はこれらのことを学べず、たとえ少しばかり体験しても往々にして忘れてしまいます。都市住民にとって農山村から伝統的知恵を学ぶことは重要な現代的課題です(シューマッハ 1973)。農山村エコミュージアムづくりの活動は持続可能な社会のモデルづくりとして存在しており、逆説的に言って、もしも農山村が過疎化、高齢化、第一次産業の衰退などにより、持続可能な社会でなくなるようなことがさらに進むようなことになれば、都市は何をモデルに持続し、発展する街づくり計画を進めるのでしょうか。東京のような巨大都市であっても、たとえ新宿のような都心においてさえも、高層ビルの周りに緑地、社寺や公園がなくなったのではなく、新宿区の調査によればむしろ緑地は回復傾向にあり、屋上に小祠が祀られ、夜間住民が少なくても新旧のお祭りを維持しているのです。これらは農山村をモデルに、都市に自然的景観を少しでも持ち込もうとする日本の伝統的な、ささやかではあるがなくてはならない自然との共存的な街づくりの営みであると思います。特定の農山村と姉妹提携をしている都市は少なくありません。東京都世田谷区、中野区、武蔵野市や神奈川県横浜市のように、子供たちの学校教育の場を拡張して、いわばセカンド・スクールを長野県などの他県農山村地域に求め、あるいは山村留学によって伝統的な知恵の体験学習を保障しようとしている事例も多く、すでに30年余りの歴史を有しています。

(2) 暮らしと学びの一体化した地域づくり

農山村に行けばエコミュージアムがどこにでもできあがっているというわけではありません。農山村エコミュージアムづくりのための素材はどこにでもある地域の自然や生活文化ですが、これらありきたりの素材を特別なものに価値付けできるのは、住民の地域への愛着と努力だと思います。長野県飯山市や山形県小国町の事例を検討すると、長年にわたる継続した努力が実を結んでいるといえます。たとえば、民宿の経営者たちの環境学習指導者としての継続研修、来訪者との相互理解力、あるいは幅広い人々・団体との協働ネットワークの構築など、素晴らしい成果を蓄積しています。生業、産業、暮らしが住民と来訪者の学びと一体化して、農山村エコミュージアムは内容豊かに成長していく活動です。新たな街づくりの構想は来訪者の知識から刺激を受け、住民によって温められ、じつくりと実現していくものである。

エコミュージアムは地域の自然や文化的伝統を大事にしますので、エコミュージアムづくりを始めるにあたって、それぞれの地域の事情をよく配慮したうえで、計画の目的を明確にせねばなりません。エコミュージアムの成果は豊かな地域社会の持続する実現です。持続可能な社会は自然、さらに人間が作り上げてきた文化、歴史と社会制度に支えられています。文明社会の中では持続可能な農業が食料の量と質を保障する必要があります。このために土壌と水、

森林と里山、野生生物および栽培化・家畜化された生物をめぐり多様性を保全管理する必要があるのです。また、これらを継続利用するためには科学的知識のみではなく、伝統的知恵も存続していなければなりません。これまで農山村社会は生物文化多様性の豊かさに裏打ちされた生活環境に支えられてきたので、村人の生業・生活の現場からの知恵を集め、民族植物学の最新研究からの知見を活用して、生物文化多様性に関わる環境学習を提供することができます。一方で、現在の日本の極めて低い食料自給率と膨大な量の食料・飼料の輸入は環境的、社会・経済的、さらには精神的にも農山村を衰退させ、言い換えれば日本の伝統文化をも衰退させています。

人間にとって最も基層の環境文化、農山村社会の豊かな伝統的知恵の体系を科学的知識の体系とともに応用すれば、その社会的機能回復とともに持続可能な地域社会のモデルを農山村エコミュージアムとして提案することができます。自然と人間との最も重要な関わりを示す生物文化多様性と農山村地域に焦点をあてて考えてみたいと思います。

持続可能な社会は何によって支えられるのでしょうか？簡略に言えば、もちろん第一に自然、次いで人間が作り上げてきた文化と社会制度です。人間は自明のことではあるが、自然の中で捕食という栄養摂取行動をとる動物であったことから原則的に逃れられてはいません。したがって、今日のにも変わることなく、まずはその生命を維持する日々の糧を何らかの手段によって得ねばなりません。文明社会の中では持続可能な農業が食料の量（生産性）と質（安全性、品質）を保障する必要があります。

このためには持続可能な環境、とりわけ、土壌と水、森林と里山、野生生物および栽培化・家畜化された生物をめぐり多様性、また、これらを保全管理し、継続利用するための伝統的知恵、生物文化の多様性も存続していなければならないのです。現代の文明社会はとりわけ大都市を中心に栄えています。都市社会を持続可能にするには、それ以前に第一次産業による生産を基礎にすえた農山村社会を持続可能にせねばなりません。日本における現在の極めて低い食料自給率と膨大な量の食料・飼料の輸入は、環境的にも社会・経済的にも、さらには精神的にも、文明社会の基盤である農山村を第一次産業の軽視、過疎化、高齢化によって突き崩していると思います。

〈参考〉生物文化多様性と農山村社会

動物行動学の研究では人間に近い霊長類であるゴリラやチンパンジーでは、たとえば、地域集団によって食べる植物の内容が異なるというように、いわば「食文化」の原初的なものをすでに形成し、道具使用ばかりではなく、道具の一次製作までもしていることが明らかにされています（河合 1979）。一層のこと多様に、人間はその野生の時代から他の生物種との関わりを文化を直接体験学習に基づく知恵の体系として伝承し、蓄えてきました。これらを生物文化 bioculture と呼びます（Moran 1999, Nazarea 1998）。生物文化の豊かな内容は人間の伝統的な暮らしに関わる栽培植物や家畜のほか、今日でも山菜・きのこ・薬草・魚類など多くの野生生物を含みます。また、全体自然も生物文化を包容するので、個別の利用法はなくても含めてよいと思います。伝統的な生業活動は、採集、狩猟、漁労、農耕（園耕を含む）、および牧畜ですが、それぞれに生物素材と利用法・技術、さらにこれらにより展開した多様な生物文化があります。たとえば、採集であれば、種子・果実・茎葉を食素材とし、加工・調理する技術と食作法や儀礼が伴うのみではなく、衣食住から遊びや信仰、資源管理や環境保全、観光に至るまでの多様な文化複合が採集をめぐりだけでも成立しているのです。日常生活は、洗顔や化粧から、食事、食器や燃料など家事、会社での仕事に関わる物品、武器、医薬品、美術工芸、遊具などの趣味にまで、すべての営みに具体的な動物・植物種から得た原素材が加工され、利用されています（Cotton 2002）。

計画の目的

日本の伝統的生業文化を環境学習の基盤として、保全、伝承、再創造する奥多摩日本村づくりを行なう。このコア・ミュージアムとして「植物と人々の博物館」を創る。

・環境学習ビジターセンターの役割

自然と文化の紹介と研修（子どもから専門職までを対象に、環境学習手法ELFの開発普及を行なう）

・郷土資料館・図書館の役割

生活民具、植物製品などを収蔵展示

農山村、農林業、植物に関わる図書の収蔵閲覧

（原沢文庫、篠遠文庫、塚原文庫、木俣文庫などの寄贈を核に始める）

(2) 通学圏エコミュージアム

エコミュージアム概念のさらに身近での応用として通学圏エコミュージアムを提案しました。目的は小学校区に通学圏エコミュージアムを構想することを通じて、小学校と地域との交流連携を図ることです。学校は地域の文化学習のセンターであった時期もありました。全国一貫的な教育制度や受験制度が進むことによって、地域学習は衰退していったのです。しかし、子どもたちが環境を学ぶ身近な場は、現代では小学校と学区です。今風にあわせるのなら、小学校の教科、とりわけ社会科、理科、生活科、総合的学習の時間に合わせて教材を提供する必要があります。さらに、できることなら、それぞれの学校の教育課程を環境学習過程に沿って編成することが望めます。通学圏エコミュージアムの主な担い手は、小学校児童、教員、保護者、地域住民です。教育委員会や地域の企業などが参加することも歓迎でしょう。小学校がコア博物館とするなら、社寺、商店街、公園、工場などがサテライト博物館です。発見の小道は通学路です。まずは地図を描き、皆で学びどころを探して、地図上に記します。その場所の由来縁起を郷土誌などで調べます。小学校区内の環境構成要素については右の図に示しました。

通学圏エコミュージアムのモデルを参照しながら、実際に小金井市立第四小学校の学区を大学院生が調査して、描いてみた図が下記のものであります。この地域で暮らしている小学生が調査したら、もっと具体的におもしろい場所が発見できたことでしょう。

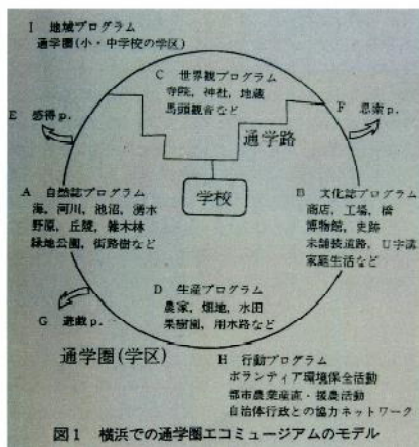
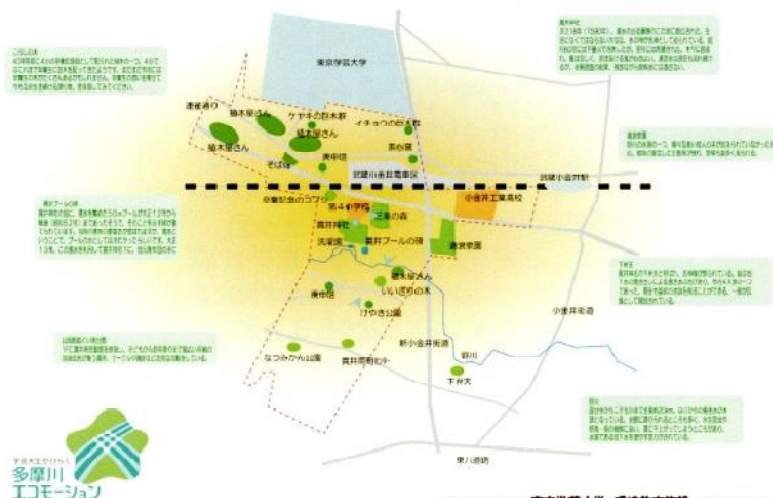


図1 横浜での通学圏エコミュージアムのモデル

大学院環境教育サブコース「環境学特論」で作成した事例

通学圏エコミュージアム

小金井市立第4小学校



Copyright (C) 2006 東京学芸大学 環境教育施設 All Rights Reserved

（3）学校園づくり

通学圏エコミュージアムの概念を借用するなら、小学校をコア博物館としてとらえ直す必要があります。新たな概念を当てはめて小学校全体を見直してみると、校舎と同様に学校園の重要性が見えてきます。この場合の学校園は植物栽培のための花壇に限定しないで、学校キャンパス全体を学校園として花壇にとらえることにします。

まず、目的を中心に全体構想を話し合ひましょう。



学校園の設計概説

- 全体の構図
キャンパス全体としてデザインする
動くものの行動、動線を考える
特色ある目標を考える
多くの人の参加方法
- 目的
教科や学級活動に使う
野外教室
ビオトープ化する
- 構成要素、内容、設計
校舎の位置
花壇、菜園、学校林、池など
風、水、日光



目的

- ・地域の公共施設である学校の緑化を実際に行う学校園づくりの基礎技能と知識を習得する。
- ・小学校区を環境学習、総合学習の場、通学圏エコミュージアムととらえて、その計画と活用までをともに議論し、提案しあう。



次のように学校園を定義してみました。この定義に従って、学校園の教育的意義を整理しました。現在でも広く学校を地域社会に開放する方向にありますが、昨今、学校で創造もしなかった事件が引き続いて起り、これ以来学校は子どものための安全警備を強化しており、幾分、入校しにくい状況にはあります。本来、子どもの安全は地域社会の大人が見守ってきたので、開放的な学校こそ安全が高いと考えられます。地域住民の皆で、次世代の子供たちを見守って生きたいものです。



学校園 school garden

- 学校園は教育環境を良好に区画し、学習活動に直接使用する重要な学校の施設・設備としての役割をもつ。校舎の装飾としての庭園ではない。
- 広義には、学校園とは学校教育の目的に沿って、学校敷地を全体として構成する学校教育環境および施設・設備といえる。



さらに、学校園を構成する要素について次にまとめました。学校の校舎自体のインテリア、その周辺のイクステリアに關しても環境ないし環境学習を進めるための教材を考えることができます。一般的に必要な設備もありますが、学校の立地条件から必要な、たとえば防風林、農園、野外ステージ、広域避難場所、災害時のための倉庫などの設備も考えねばなりません。子どもたちが一日の、あるいは人生の始まりの多くの時間を過ごす場所ですから、暮らし心地が良いように、設計する必要があります。

表1. 学校園の教育的意義

教育環境の設定	美しい環境、周辺地域からの区画
健康、安全確保	気象の緩和、災害・公害防止
情操涵養	自然の恵み、慰安、休養
科学的態度の育成	教材園、百葉箱、実物による実験・観察の場
自主性、社会性の伸長	学校園の管理、運営や学校行事・集会の広場としての利用
運動・遊戯の場	体育施設や野外の大型遊具の設置
生産・経済活動の経験	農園、学校林の経営、栽培・飼育活動など
地域社会の利用	社会体育施設、公害観測点、災害避難場所、集会場など

表2. 学校園の構成：施設・設備

施設・設備	内容
学校建築	校舎、体育館、インテリア、イクステリア
運営	門、塀、案内板、広場、駐車場、自転車置き場
環境保全	防災林(風、砂、音)、生垣植樹帯、公害観測器
学習	教材園、動物飼育舎、池川、温室、学校ビオトープ
保健・衛生	手足の洗い場、水飲み場、ごみ処場
遊戯	滑り台、ブランコ、シーソー、砂場、
体育	プール、運動場、体育館、更衣室、器具置き場
記念	記念樹、記念碑
休養	花壇、噴水、緑陰樹、あずまや
生産	農園、学校林、鶏舎、農具置き場、作業場(工芸、食品加工)
特殊	野外ステージ
地域社会への開放	社会体育、視聴覚室、災害避難場所